

# 山と博物館

第18巻 第3号

1973年3月25日

大町山岳博物館



歩道工事中の木崎湖岸 山崎にて

撮影 海川庄一

## 木崎湖の岸辺

木崎湖の南部東岸、山崎地区に、いま国道の歩道新設工事が進められている。交通量の激しい国道をきけた通学道路にもなる歩く人間のための道ができるのだから、こんな結構なことではない。ただ、路傍に木を植える余地もないこと、湖岸が石積みで固められていくことが、何とも気がかりである。

山崎地区は湖岸いっぱいには家の軒が並んでいるため、いま建設中の歩道は、湖を埋め立てて作られている。したがって湖岸は無味乾燥なブロック積みとなってしまった。

国・県ではこの道路を更に湖畔の北部まで延長することを考えているようである。もっとも通学路・遊歩道として地元の要望も強いこうした点を考えると、この際、湖岸の保全利用の抜本策を国・県・市・地域住民が一体となって考えることの必要を痛感する。

木崎湖は冬の間、昭和電工K・Kの発電用取水のため水位が二倍ほど低下する。このため湖岸近くの水草はほとんど育たなくなっている。また、水位変動により湖岸が崩れ易くなったとの理由から、地元では補償をとって湖岸のあちこちに護岸工事を施して来た。こうして石積み、また石積みの湖岸ができてしまった。

だいたい湖というのは沿岸部の湖底や岸の自然な風致が保たれなくては、観光面からみても、教育環境という面からみても、価値の乏しいものとなる。通学用歩道はあえて水辺を通すこともなからう。国道を付け替えば旧道の一部は使うこともできる。湖岸には別に必要な場所を限って自然観察路を特設する方がよい。通学用歩道と自然観察路(水辺遊歩道)との間には緑地帯または水辺公園を造成し、車を一切入れないで、自然の保護と育成をはかったらどうだろう。水位低下も止めてもらう方がよい。そのことがふるさとの湖をよみがえらせる道だと思ふ。(海川庄一)

# (続)安曇地域の地質と化石

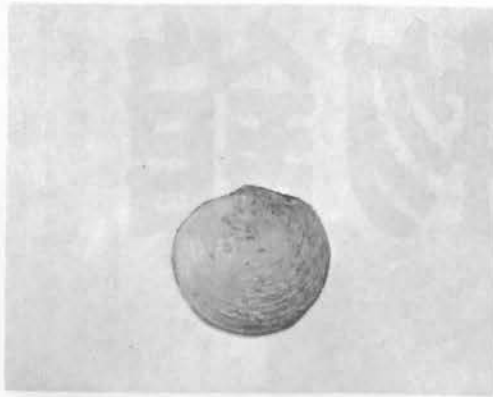
田中邦雄

## 六、ツキガイモドキ

*Lucinoma acutilineatum* (CONRAD)

殻の大きさは三つに前後で、円形でふくらみは弱く、扁平である。殻はやや薄質で、左右の殻は等殻片。殻頂はほぼ中央にあり、小さく、前方に向けて突出し、その前に小さな小月面がある。前後両背縁は直線状で、前後端は丸く、腹縁は弧状。殻の表面にはやや板状になった成長脈がある。歯は小さな主歯があり、側歯の発達は弱い。殻の内側の筋痕は前後の形がらがつており、後筋痕は卵円形で前筋痕は細長い。套線は湾入しない。

学名の *acutilineatum* は「鋭い線を有する」という意味である。これは殻の表面にある板状になった成長脈のことを意味している。この種類は日本各地の新第三系から産出が



*Lucinoma acutilineatum* (CONRAD)

× 1/1

報告されており、その時代は漸新世から現世までで、特に中新世に多い。県内では東筑摩郡、上水内郡、下伊那郡の第三組層から産出し、安曇地域では、小谷村千国崎、池田町八代沢から産出し、特に後者は多産する。現生種はアラスカ、カリフォルニア、北海道南部から九州にかけての日本沿岸などの内湾の水深一〇―一五〇メートルの泥底や水深一〇〇―二〇〇メートルの大陸棚にすんでいる。

## 七、アカイシカガミ

*Dosinia akaishiana* NOMURA

殻はこの属としてはあまり大きくなく中位で、形は円形に近い。長さど高さほぼ等しいが、長さがやや大きい。ふくらみはあまり著しくない。殻は中位の厚さであまり堅固でない。殻頂は中央よりわずかに前方に位置し



*Dosinia akaishiana* NOMURA

× 1/1

小さく、突出する。前縁、後縁、腹縁ともに半円形で丸い。後背縁はわずかにふくらみ、丸い後縁につながるが、前背縁は凹み、ここに小月面が形成されている。小月面は深く、外形は心臟形で、周囲と明瞭な稜で境している。その中には長軸方向にわずかに条線がみられる。殻頂の後方にある楕圓は細長く線状である。殻の表面には細かい同心円状の成長脈がよく発達している。殻の内面は平滑で、腹縁内面も平滑、套線湾入は深く、先端は尖っている。筋痕は明らかである。

この種は一九三五年野村七平氏によって、青森県西津軽郡赤石村(現在鯉ヶ沢町)の中新世から産した化石種につけられたもので、その後、福島県、岩手県、和歌山県などの中新世の地層から産出することが報告されている。県下では北安曇郡池田町八代沢と下伊那郡阿南町富草から産出している。池田町八代沢では本種に近い種類の化石種カネハラカガミ〔*Dosinia* (*Kaneharaia*) *Kaneharai* YOKOYAMA〕が産出している。

## 八、コイサキガイ

*Macoma tokyoensis* MAKIYAMA

殻は中形で、形は長卵形で後方へ細まる。



*Macoma tokyoensis* MAKIYAMA

× 1/1

殻頂から後腹縁へ褶が走り、そのため、殻の後部は右へ曲がる。ふくらみは弱く、極めて扁平である。殻は薄質、殻頂は中央よりもやや後方よりで、わずかに突出する。前背縁は弧状で前縁から腹縁につづき、後背縁は直線状で、細まった後縁を通過して腹縁につづく。前縁は丸く広く、後縁は短くて截断状。左右両殻は後端で狭く開く。殻は全体にうすく破損しやすい。殻の表面には同心円状の成長脈があるが、一般に腹縁に近いものほどよく保存されている。歯は発達が悪く、弱い主歯が二個あるだけで側歯はない。筋痕は長卵円形で、前筋痕はやや細長い。套線湾入は殻の中央まで入り、先端は幅広い。

本種は北海道から島根県までの日本の各地の中新世から産出が報告されている。現生種は内湾や内海で普通水深一〇―三〇メートルの泥質のところが多い。形も長卵形から卵形、ふくらみも強いものから弱いもの等様々の変化がみられる。県内では下伊那の富草層群やこの地域では池田町八代沢から産出する。

## 九、ミノイソジミ

*Soletellina* (*Nuttallia*) *minoensis* YOKOYAMA

殻は中型ないし大型。外見は横に長い卵形



*Soletellina* (*Nuttallia*) *minoensis* YOKOYAMA

× 1/1



Neverita (Glossaulax) didyma (RODING) × 1/1

。全体に扁平で、ふくらみは弱い。殻頂は背縁の中央やや、前方に偏っている。前縁は丸く、後縁は截断状である。腹縁は大きく弧をえがく。通常後端は少し開いている。殻の表面には細かな成長脈がよく発達している。殻頂は小さくて、突出しない。歯は主歯だけで側歯はない。套線溝入は深く、溝入の先端は丸い。筋痕は前後にあり、前筋痕は丸く、後筋痕は細長い。腹縁内面は平滑。

この種は一九二六年横山又次郎氏によって岐阜県(美濃)の月吉からはじめて報告されたもので、この名がつけられた。日本各地の中新世の地層から報告されている。県下では下伊那郡阿南町富草、上水内郡などから産出する。

十、ツメタガイ

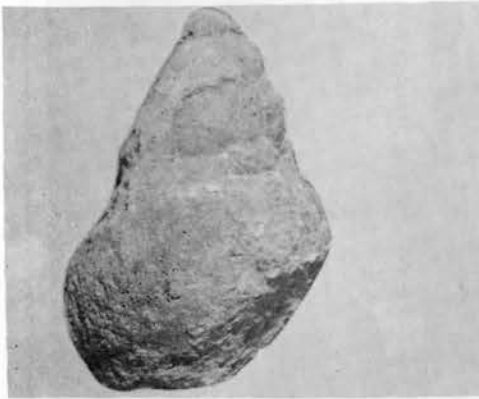
Neverita (Glossaulax) didyma (RODING)

。殻口は広くて円形で、後方は角ばり、前方部は円形を示す。外唇の周辺は丸くて厚い。内唇は直線状で滑層と合して厚い。軸唇は短く太い。

この類は現在日本近海に生息しており、化石として第三紀以降に多く産出している。砂中にもぐつてすみ、二枚貝などに穴をあけて食害する。種名の didyma は「双生」、「二個連子」の意味で、臍盤が中央の溝によって二分されていることを示している。美麻村中ノ沢から産出する。

十一、Neptunea modesta (KURODA)

エゾバイ科



Neptunea modesta (KURODA) × 8/10

外形は太い紡錘形で、殻は大きく、厚く、堅固。螺塔は円錐形で七階、各螺塔のふくらみはそれほど著しくない。縫合は著しく、殻口は大きい。殻表には四本の鋭い螺肋がある。体層は丸くふくらみ、周縁は丸い。殻口は長卵形で、水管溝はやや長く、斜下方へのび開いている。軸唇は湾曲する。

この種は豊科町柏沢から産出したものを模範式として、一九三一年黒田徳米によって新種として発表されたもので、このほか北安曇郡美麻村千見中ノ沢、池田町八代沢などから産出し、また上水内郡中条村、小川村、戸隠村からも産出する。現生種のヒメエゾボラモドキ (Neptunea minor HIRASE) によく似ている。Neptunea 属は寒海産のものが多く、日本近海では比較的深いところに生活している。

十二、ヤマサキタマキガイ

Glycymeris yamasakii (YOKOYAMA)



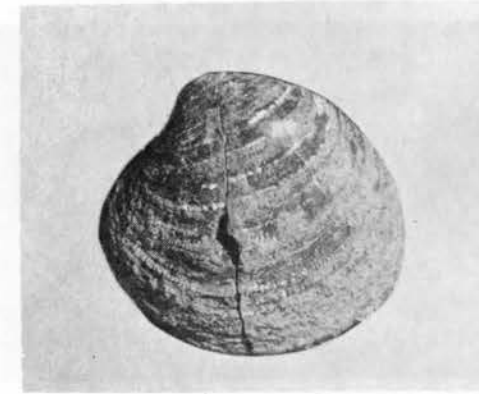
Glycymeris yamasakii (YOKOYAMA) × 1/1

外形は類円形で、殻は厚く、堅固である。膨らみは弱く、やや扁平。殻頂は背縁のほぼ中央にあつて、わずかに光る。殻の表面には細く浅い放射肋と、同心円状の成長脈が発達する。殻の内面には鉸面にそつて多数の歯がならび、側方で大きくなり、外方へ傾く。腹縁の内面は鋸歯状に刻まれている。殻頂直下の韌帯におおわれた面は三角形で、ここにこの種によく似た種にはミノチタマキガイ (Glycymeris minochiensis MAKIYAMA) がある。現生種ではエゾタマキガイ (Glycymeris yessoensis SOWERBY) によく似ている。

北安曇郡美麻村千見中ノ沢や小谷村千国崎などのほか、上水内郡中条村、戸隠村などからも産出している。

十三、チタニビノスガイ

Mercenaria chitanana (YOKOYAMA)



Mercenaria chitanana (YOKOYAMA) × 1/1

外形はハマグリ型ないし卵三角形。殻は厚く、堅固。ふくらみは著しくない。殻頂は前方に偏り、後背縁は長く、前背縁は短い。小月面は小さくハート型で、殻頂の前にあり、楕面は狭く、細長い。前縁は丸く、後縁はゆるく湾曲する。殻の表面には板状の成長脈があり、この間には細かい放射細脈がある。鉸面は厚く、強く、三主歯がある。腹縁内面は平滑で刻まれない。

この属は日本の新第三紀の地層から数種類が産出している。県下では、Mercenaria yizukai と Mercenaria shigamensis が産出している。後者は鮮新世の榎累層から産出し、前者は中新世の地層から多く産出する。この地域では南安曇郡豊科町小松沢、北安曇郡池田町八代沢から産出している。

十四、ウロロの化石

第三紀層の泥質の岩石からは魚鱗の化石を多産する。県下の別所累層からは十数種が識別されている。特に多いものはニシン科のもので、ハダカイワシ科のものである。この地

# カモシカ大使は

## 「太郎」と「辰子」

### 「木曾生」の負傷で急遽変更

中国から日本へ贈られたパンダのお礼として中国へ贈られる予定であった本館のカモシカ「木曾生」と「町子」のうち、「木曾生」が去る三月二十二日午後二時頃、右目に眼底骨に達する刺傷を負い、失明もまぬがれない状態となりました。観覧者によって起された事故という見方が強くなっておりますが、何れにしても、「木曾生」の北京行きは不可能となりました。そこで当館では、急遽、中国へ送るカモシカを、「太郎」と「辰子」に変更しました。「町子」は「太郎」の妹に当るので、「太郎」のお嫁さんには「辰子」が選ばれたわけです。



新しくカモシカ大使として選ばれた二頭は、三月二十五日、当館から上野動物園へ運ばれ、ここで一週間の検査を受け、来る四月三日、中国へ渡る大相撲の一行と共に、羽田から飛行機で北京へ向かいます。

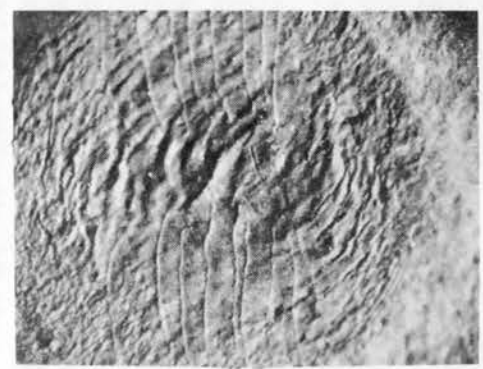
「太郎」は昭和四十五年五月二十九日、山岳博物館で飼育中の「大助」と「あつ子」の間に生れたカモシカであり、当館での出生第一号です。母親「あつ子」の乳を充分に飲んで、すくすくと育った長男坊であり、至つて気持の優しいカモシカです。

また、「太郎」の伴侶として共に中国へ渡ることになった「辰子」は、昭和四十七年三月十五日、長野県辰野町の山中の道路上で、腹痛のためうずくまっていたところを地元営林署員に保護され、当館へ引取られたカモシカです。保護当時、生後一年くらいでしたから、「太郎」よりも一〇ヶ月くらい若く、現在満二才です。

雄の「太郎」はすでに生殖能力を持つっており、雌の「辰子」も、この秋には繁殖可能年齢になりますので、来年は北京動物園においてカモシカ二世の誕生をみる事ができるものと期待しています。

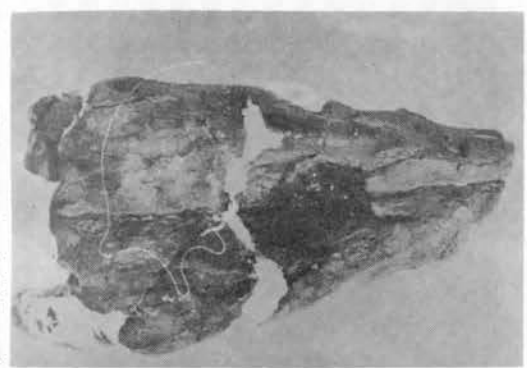
カモシカは飼料の変化やストレスによって胃腸障害を起し易い動物です。私たちは二頭のカモシカが、無事、北京の気候に順応し、新しい飼育施設と餌にも馴れて、日中友交親善のかけ橋としての大任を果たし、ニホンカモシカへの国際的関心を深めることに役立つと共に、いつまでも健康で長生きしてくれることを祈っております。

(海川)



ニシン科魚鱗の化石

X 6



セイウチ

x 1/5

域から産するものはニシン科の魚鱗だけで、その特徴は、魚鱗としては大型で、大きなものはハイライトの断面ほどの大きさである。形は楕円形で、長さよりも幅がやや大きい。鱗面には横走る数条の溝条があり、中央部で切れている。頂部には弱い放射形の溝条があり、基部には強い溝条が数本ある。隆起線は頂部をのぞいて全面に横走している。一側に六〇本もあり、かなり密である。中心部は両側縁からの中央と頂部との境界あたりにある。この鱗は現生のニシン科の鱗相、すなわち、溝条、隆起線、中心部の状態とかなりよく類似している。ニシン科であることはまちがいないが、さらに細部についてはまだ十分な研究が行われていない。

鱗の化石は県内では別所累層の黒色泥岩や下伊那郡の富草層群の新木田層のシルト岩などから多く産出している。この地域では小谷温泉付近、中谷川下流などの泥質岩から産出するが、やや砂質であるために保存はよくない。

### 十五、セイウチの化石

一九六二年暮豊科町沢区柏沢から海獣の頭骨の化石が発見された。この化石は頭蓋骨の前半、すなわち鼻骨、上顎骨、切歯骨、前

頭骨の一部から形成されており、犬歯だけが残って、他の歯は消失している。専門的な特徴については省略するが、鼻骨が細長く、長楕円形であることや鼻孔が鼻骨前方に鼻骨とほぼ同一平面に開口し、その前方に広く大きな切歯骨の平坦部がある点などは、有名なデスマスチルスの特徴と一致し、一時はデスマスチルスの発見と誤認されたほどである。しかし、よく検討すると、食肉類の特徴もいくつかみつけられ、食肉性の海獣、鯨類に近縁でアシカやセイウチの類に属するものであることが明らかになった。充分な比較検討は行われていないが、犬歯は常盤炭田から産出したセイウチの犬歯とは非常によく似ている。恐らくセイウチに類した海獣であると思われる。

以上安曇地域の地質の概要とここに産する主な化石について解説と紹介をした。

(信大教養部教授・理博)

山と博物館 第18巻 第3号  
 発行所 長野県大町市TEL.0261-211111  
 印刷所 大町市下仲町山岳博物館  
 定価 年額 四〇〇円(送料共)(印不可)  
 郵便振替口座番号(長野二二、二九三)